



特集
海外の目から見た北陸



左上：ブラジルの快適なテラス
左下：ブラジルのまちなみ

右上：acerenzaのまちなみ
右下：台湾台北の集合住宅

支部ニュース「AH!」の第24号をお届けいたします。
今回も引き続き「海外の目から見た北陸」というテーマで
福井支所のお世話で座談会が行われました。
イタリア・台湾・ブラジルと福井での生活の違いが生き生きと語られています。

海外の目から見た北陸

2003年3月17日福井大学工学部建築建設工学科
ゼミ室にて

出席者：アネリーゼ・エルハールドさん(ブラジル)
福井大学大学院 学生
アナリタ・ヤンニエッコさん(イタリア)
国際交流員
陳 垂鈴さん(台湾)
主婦
司 会：朱 政徳さん
福井大学大学院 学生
菊地 吉信
福井大学 助手

朱：まず、福井へ来たきっかけなど、簡単な自己紹介をお願いします。

アネリーゼ：ブラジルから来ました。4年前に日本へ来たのですが、半年間は日本語を勉強するため金沢に住んでいました。福井へ来て修士課程を修了して、いま博士課程の1年生です。繊維関係の勉強をしています。

アナリタ：鯖江市役所と国際交流協会で働いています。日本へ来たのは1年半前。

菊地：ずっと鯖江ですか？

アナリタ：ずっと鯖江です。だから車がないと不便。最初の1ヶ月だけ自転車でも我慢できなくなって。

陳：日本へ来て、かれこれ20年になります。最初は留学のため東京へ来て、東京は11年くらい住んでいました。そのあと結婚して、主人は福井の人だったので戻ってきて、いまは主人の家を改築して両親と住んでいます。

菊地：二世帯住宅ですか。

陳：もともと二世帯住宅ではなくて、古い家をいろいろ改築しました。でも、バリアフリーまではしてなかったから、その辺が不便かな。将来のことを考えると、最初からそうやっていけば。

菊地：日本の住宅はとくにバリアが多いですね。

福井の印象

朱：では、福井へ来たときの第一印象について。

アネリーゼ：はじめて駅から出たときは結構いい感じでした。駅からはちっちゃく見えるから。ちっちゃい街と思いましたけど、大学まで来ると、そんなにちっちゃくない。その後は、福井はすごいとこ



福井大学大学院 学生
アネリーゼ・エルハールドさん



国際交流員
アナリタ・ヤンニエッコさん

ろねえ、と。きれいだし住みやすいし。ほんとに、福井大好きです。

朱：将来は福井市の市長(笑)。

アナリタ：私のイメージはちょっと違うかもしれない(笑)。イタリアからここへ来たときには、「ほんとに家がないな、建物がないな」と思った。町のつくり方はきれいじゃない。ぜんぜん決まりごとがないみたい。

日本人とイタリア人は習慣もぜんぜん違う。最初、鯖江に着いたとき、夜8時頃に「さあ散歩しよう」と思って自転車乗って外へ出たら真っ暗。電気もないし、「なにこれ？」と思って(笑)。いちばん鯖江の中心に行ったのに誰もいない。

朱：地元はイタリアのどこですか？

アナリタ：地元は田舎。3000人だけ。だけど、福井と比べると、もっと賑やか。イメージはぜんぜん違う。菊地：もっと集中して、コンパクトになっているんですね。

アナリタ：そう。日本の街は中心がない。だから夜になると友達と行くとか人が行くところがない。イタリアだったらどこでも、大きな町も小さな町も、広場と誰でも知っている通りがある。それと、時間がずれている。イタリア人は、夜は8時でも外出する。友達と遊びに行くとか、散歩だけとか、外に座って話すだけでも。

朱：では、いちばん大事な陳さんの結論。いま、評価はプラスとマイナス一人ずつ・・・(笑)。

陳：20歳で日本へ来て、最初は東京だった。しばらくは就職していたんですけど、そこで結婚して、福井へ戻ってきた年がちょうどこれから子供を育てようという年だったので、主婦にとって、子供にとって良い環境はなにか、というところ田舎。若い人にとってはちょっと物足りないところがあるけど、私の年にはちょうど良かった。

でも、子供が手のかからない年になって、さて、なにか勉強しようと思ったら物足りなくなる。情報が少ない。インテリアの勉強しようと思ったけど、福井はあまりないから。金沢まで行こうかなとも思うけど、通学の時間とかお金がかかるから、福井にそういう学校があれば、もっと住みたがるというか・・・

菊地：そうですね。最近日本でも、年を取ってから、



主婦
陳 亜鈴さん



福井大学大学院 学生
朱 政徳さん



福井大学 助手
菊地 吉信さん

新しく勉強してみよう、趣味を持とうというのはありますが、そのアクセスがないということですね。
陳:都会から田舎へ戻りたい人たちにとって、田舎に求められるものは満たされているんだけど、都会の良い面は、やはり情報とか。もちろんインターネットもあるけど、人間は学校へ行って勉強して、そういう人間同士のふれあいが大事。その環境作りがまだできていないと思う。

住まい

朱:住宅について、なにか思うことがあれば。
アネリーゼ:一応、いま学生だから、この生活で我慢します。でも、日本のアパートは小さい。私が引っ越ししたのは10月で、すごく不便。アパートもないしあまり選べなかった。とくにベランダが小さい。あとは、学生のアパートは、どうして台所と洗濯機が同じところにあるの?きれいにしたいけどできない(笑)。

あと、台所と寝る部屋のあいだにぜんぜんドアもないし、冬は寒くて、暖かくするのにエネルギーがかかるから、それもどうして考えないんだろうと思ってました。

アナリタ:私のところもすごくカワイイ。部屋2つと台所とトイレとお風呂は別々。洗濯機も別(笑)。でもやっぱり不便。一番不便なところは、ゴミを捨てること。ブラジルはぜんぶ一緒に捨てる?

アネリーゼ:私、化学専門だから(笑)、分別はすごく大切なことと思います。

アナリタ:私もすごく大切だと思いますけど、生ゴミは木曜日まで家の中に置いておくのは臭い(笑)。しかも時間は朝8時までだけ。前の夜はダメ。休みの日でも朝7時に起きなくてはいけない。すごく不便。あと、日本は大きいゴミを捨てる時困る。

朱:日本人の友達の部屋へ行ったことありますか?

アナリタ:あります。一軒家へ行くとすごくきれい。ちょっと田舎のほうだと、すごく大きくて。でも、私のアパートも、イタリアだったら誰も住まないと思う。

陳:台湾のマンションの特徴は、だいたい、どこのマンションでも2つの風呂場があるんです。主寝室の中に夫婦用の風呂場がついていて、それと別に、お客様とか子供が使う風呂場がもう一つある。福井へ

来て面白いと思った特徴はサンルームですね。北陸の気候に生れた知恵かな、と。それは東京と違ったところ。

アナリタ:でも、やっぱり習慣が違うから。イタリアはブラジルとたぶん一緒に、家の中で過ごす時間が長い。だから広い。家の中で食事したりパーティーしたりするでしょう。日本で、人の家に誘われることはあまり多くない。誘われたら、「じゃあ、どこかへ一緒に食べに行きましょう」となるけど、イタリアだったら「じゃあ私の家へおいでよ」となって、ほとんど家の中。だから、(日本は)そんなに大きい家は必要ないのかな(笑)。



台湾の一般的なリビング

アネリーゼ:あとはね、たとえばブラジルの家へ行ったら、庭を見せてあげるとかベランダを見せてあげるとか、ぜんぶ見せてあげる。日本では、一つの部屋へ入ってお茶を飲んで、ケーキを食べて、終わり。寝る部屋は絶対見えない。でもブラジルだったら、「どうぞどうぞ」と言って見せてくれます。はじめてのお友達でも家を見せてあげたい。

菊地:台湾はどうですか?

陳:夫婦の部屋は見せないけど、子供部屋までなら(笑)。

まち

菊地:福井のまちについて、なにかご意見があれば。

アネリーゼ:アメリカもヨーロッパも、待ち合わせの場所が絶対あります。ブラジルもある。夜遅くまで散歩して、友達と会ったり話したり。そういう場所がある。日本はない。でも不便ということではないです。日本はすごい住みやすいところです。どこでもルートが多い。たとえば福井から鯖江へ行くとき、いろいろなルートがあります。ブラジルはそうじゃない。

アナリタ:でも、福井から鯖江まで帰りたかったら、夜遅くなるともう電車はない(笑)。すごく不便。

朱:自分の国は夜10時以降も同じように賑やかですか?

アナリタ:同じではないけど、夜中の3時とかでもちゃんとバスはある。少なくとも1時間に1本。

朱:陳さんは最初東京に住んでいましたが、福井とどんな違いがありますか。

陳:東京はとても好き。新宿とか高層ビルのあるところ。「都会だなあ」と思っちゃう。福井へ戻ったら、その気持ちを切り換えなきゃいけない。生活のスタイルもぜんぶ変えなきゃいけないし。

福井も道路工事とかいっぱいやってるじゃないですか。お金が余っているならもっと違うころ、もっと「これが福井か」というインパクトのあるものに使えば良いんじゃないかなと思う。要らない駐車場とかしなくても。

アネリーゼ:駅は本当にそう思う。外から来る人は見る人がいるかどうかかわからないけど、4年前は(国道)8号線沿いには何もなかった。いまはすごい増えた。でも外から来るとあちは行かない。友達が来たら、あちのほうでいろいろ見せてあげるから。駅はちょっと(笑)。

アナリタ:私が思っていることは、福井県に都会の雰囲気は合わない。合わないということは、不便なところはいっぱいあるけど、でも、今立町へ行ったら和紙もできるでしょう、宮崎村へ行ったら蒔絵の村とか。これが特徴だと思う。都会の雰囲気は作られない。でも日本的な体験はできるから。

陳:ただ、見るところが離れているから。案内の人がいれば良いけど、バスに乗ったりすると短い時間でたくさん見れない。観光しなくても良いんだけど、なんか、さびれちゃうかなと思って(笑)。

コミュニケーション

菊地:そこへ行くと、イタリアの町は3000人だけ、もっと元気があると。

アナリタ:そうそう。ちゃんとコンパクトだから、みんな散歩するとか、道歩く人みんな知ってる。すごく面白い。悪いところもいっぱいあるけど(笑)。みんな他の人のことを知ってるとか・・・でも、やっぱりすごく懐かしい。

菊地:どうやら、コミュニティというのがキーワードですね。福井に住んでいても、そういうコミュニティを持っている人は楽しめるけど。

アネリーゼ:たとえば、ブラジルはコンビニがない。でもパン屋さんとか、小さいスーパーがあるから、小さいスーパーのオーナーは自分で働いて、まわりに住んでいる人たちみんな知っているから。友達みたい。

アナリタ:日本人はすごく優しい。なんでもやってくれる。イタリアでは考えられないことも(笑)。でも友達になるのは難しい。本当に気持ちが通じるのは難しい。

菊地:それこそ家にも呼ばないし・・・

アナリタ:そう。仲良くても家にはあまり呼ばない。だから、私のプライベートは私のプライベートという感じ。

菊地:陳さん、実際に家庭に入られた方の感想として

は？

陳:主人の家は、家の中では福井弁も喋らない。だから私が外国人という意識はあまり感じない。そういう点ではすごいラッキーだった。

交友関係の面では、本当の友達ができたのは、子供ができて学校に通ってから。それでも、外国人は日本人どうし以上に努力しなければ。子供の面でも、自分の子供は友達をたくさん作ってほしいから、友達をたくさん家に呼んで。そのうち、そのお母さんとも仲良くなって。

だから、最近、街で外国人を見かけると、助けてあげたくなるんです。おせっかいになるんですよ。自分の経験があるから(笑)。

菊地:逆に言うと、そういうコミュニティに一回入れれば、多少の不便もそんなに気にならないものですか？

陳:みんなしょせん人間だから。私の場合は、子供ができてから、もうここにいなきゃならないという自分がいて、プラス思考に考えていかないといけないし。そういう同じ価値観がある人はだいたい県外の人ばかり。だって「外国人」だから(笑)。

菊地:お母さんたちは結婚で県外から来る人が多いから。

陳:そう。逆に、お嫁までずっと福井に住んでいる人は、あまり友達がいらないんですよ。幼馴染の友達もみんな福井人だから。でも、外国人は友達を作らないと生きていけないんです。

菊地:なんか、きょうは建築学会ですからね(笑)。家とか街とかについて伺おうと思ったんですけど、詰まるところはコミュニケーションですね(笑)。もちろん家やまちの違うところあるけど、文化とか風習とかの違いということで理解できる。でも、コミュニティに入れるかどうかで楽しさとか生活のクオリティがぜんぜん違うということですね。

朱:日本では、家は家でプライベートの空間、コミュニティの場所じゃないということでしょうか。

陳:挨拶ことばで「こんど家に遊びに来てください」と言うのね。

アナリタ:でもね・・・イタリアで家に人を呼ぶのは、もともと自分の家を見せたいからだと思う(笑)。

お話を伺い、コミュニケーションの場をどのように生み出すかは、これからのまちづくりや住まいづくりにおける大きな課題であると実感しました。

なお、座談会では、ゼミ室と同規模(約15畳)の台所の話や、火災報知器を通路灯のスイッチと間違えて押した話、夏場にタオルを首に掛けるのを見て格好悪いと思っていたのに一週間後に自分もやっていた話、共同浴場で他人の裸を見て驚いた話など、掲載した以外にも面白い話をたくさん聴かせていただきましたが、残念ながら紙面の都合により割愛させていただきました。ご了承ください。

ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

雪国移動教室



雁木通り見学

さる1月29日に東京都青梅市立成木小学校5年生の児童29人が「雪国移動教室」として上越市高田を訪れた。上越市の依頼を受け私が案内役をすることに

なった。彼らは事前に「雁木」についての勉強を行い、数々の質問を持って現地高田にむかった。当日はこれこそ雪の高田を思わせる吹雪が子供たちを出迎えた。まずはセンターでレクチャーを行い、越後高田の雁木が江戸時代に如何にできたか。三百数十年経った今でも十数キロの日本一の雁木通りが続いている事。雁木には「造り込み型雁木」と「落とし型雁木」がある事。その他にも新潟県内の各地や、東北地方にも残っていることを説明した。その後吹雪の雁木通りに出て行った。全ての子供達は雁木を見るのは初めてであった。今まで学校での写真と想像だけの世界が目の前に広がり、元気のいい子供達の目がますます輝いてきた。子供達の姿を見て、通りの呉服屋さんが声をかけてくれた。古い商家の形を残す店構えの町屋である。予定外のチャンスだった。お店の中で町屋の特徴を話すことができた。雪の雁木通りを歩いている時、道路の消雪パイプから水が出てきた。道路から水が出るなんて子供達にとって初めての体験である。消えていく道路の雪を見ながらその必要性を肌で感じてくれた。さらに町並みを進み、江戸時代の「造り込み型雁木」を持つ旧染物屋さんを見学した。ご主人が暖かく迎えてくれ、たたきの土間(ミセ)、吹き抜けの茶の間と明かり取り、裏まで続きたたき土間の通り(ニワ)、建物の中にある土蔵、作業場、中庭等、興味津々に見続けていた。高田駅前までの雁木通り

を元気よく歩き、町の人達に声をかけられながら数時間の体験を終えた。その後は妙高へ行ってスキー体験である。学校へ帰り、まとめに入った様である。数日後子供達全員から感想を交えた手紙が届いた。こんな嬉しい仕事したのは初めてである。

(株)清水組 清水 恵一



町屋見学

想を交えた手紙が届いた。こんな嬉しい仕事したのは初めてである。



地域の方も参加した設置作業

この街 わたしたちが造ってみたい! 「見て」、「聞いて」、「考えて」……平成12年度より、授業や部活動等で「地域との連携」に取り組んでいる。市のイベントに参加したり、公園にRCベンチを製作し、寄贈している。生徒は、一生懸命に心を込めて取り組んでいる。これから、専門高校と地域との連携がいろんな場面で、さかんに押し進められることと思われる。

民家のすばらしさを伝える為の活動について

現在、「特定非営利法人 日本民家再生リサイクル協会」という会員数約2200名の全国的組織があります。私はこの協会の北関東・甲信越地区の会員ですが、この組織の理念は、幾瀬代も風雪に耐えてきた日本の民家が、経済・社会構造や生活様式の変化の中で取り壊され、失われつつあります。伝統的な日本の民家は、地元で育った木と地域の人々の技術によって造られた、風土に合った住まいであり、日本の住文化の結晶といえます。大量生産・消費・廃棄の社会システムのもとで、地球環境問題、産業廃棄物対策から循環型社会の実現が緊急の課題となり、住宅についても再生リサイクルが求められ、すぐれて循環型の住まいである民家が注目を集めています。このような情勢のなかで、日本の民家の保存、再生、リサイクルに関する社会的啓発に努め、情報交換、技術交流、調査研究等を行うとともに、民家の再生と古材にのりリサイクルに関する需要と供給を結ぶネットワークづくりをすすめ、さらに日本の森林文化や住文化のあり方を探り、資源を有効利用する循環型社会の実現を目的にされています。この理念のもとに、昔の日本の民家のすばらしさや、古い民家の再生方法などが掲載された情報

誌の発行、古い民家を再生した見学会、民家についての各種講演会及び技術交流会、様々な事情で民家を手放さなくてはならない方の想いをつなぎ、日本の住文化を引き継ぐ為の一環として手放す方と(無償提供)と欲しい方を結ぶ活動(民家バンク?情報誌に手放される民家を掲載)などがあります。私は北関東・甲信越地区の事務局をしていた時に非常に感じました事は、この協会の会員が事業者だけでなく本当に普通の一般の人が多いということ、つまり昔の民家(住宅)の良さを見直している、またまさに大量生産・消費・廃棄の社会に疑問を持ち始めた方がたくさんいるということです。何度か、民家見学会を企画し開催しましたがいつも定員オーバーになるぐらい全国から参加された方のほとんどが実際に同じ事を言っていました。

これからも、古き良き時代の日本の民家のすばらしさを伝える為の活動をしていきたいと想います。

(株)堀内組 堀内 達也



リサイクル材料を用いたRCベンチ

須藤良平 (新潟県立高田工業高等学校土木科)

建築紛争を考える

先日、富山支所の勉強会として「建築紛争の現状と課題」と題しての講演会が開催された。最近、各種の建築雑誌にも建築紛争の話題が取り上げられることが多くなっていたり、建築学会においても「司法支援建築会議」が設立されたりしている。ちょうど自分でも調査しているところでもあったので、大変関心をもって講演を聞くことができた。富山県建築センターとの共催ということもあって工務店経営者の方たちも多数参加していた。建築紛争に対する関心の高まりと紛争が多くなって身近な問題として捉えていることの現われと思われる。

弁護士、調停委員、鑑定人の3人が、それぞれの立場からの講演であった。弁護士の方からはいくつかの判例を示しながらの解説であった。調停委員(会員)の方からは、調停の進め方や紛争の原因についての話だった。また、鑑定人(会員)の方からは、責任の重さや正確な鑑定を心掛けていることなどを話された。建築のあらゆる場面で紛争が発生していることがよく分かった。ほとんどが建築主と設計者、施工者との間の争いである。一旦紛争になり、調停や裁判になった場合、当事者の精神的苦痛や経済的な負担は想像を越えたものである。

実務者として、日ごろの業務を行う中で日常的に紛争にまきこまれる可能性があるわけであり、いろいろと考えさせられることが多かった。仕事をする上において、設計や施工の良し悪しのツケはすべて建築主にまわると云うことは忘れてはならない。長い時間をかけて築いた建築主との信頼関係などほんの些細なことから不信感に変わってしまうものである。また、建築主は建築に関しては素人、我々は建築の専門家であるという自覚と、素人であっても決して無知な素人ではなく、時にはまことに怖い素人であるという認識を持つことも大切である。そして、常に紛争にならないように努力することが求められる。今回の講演会でそのヒントがいくつかつかめた。

建築主が納得できる説明、確実な図面をしっかりと書くこと、建築主との密なコミュニケーション、記録を残すことなどである。また、建築主からの要望に対する誠実な対応も必要であろう。

住宅の品質確保の促進等に関する法律(品確法)の施行など、消費者の立場を重視した制度が整備されつつあり、設計者や施工者など専門家の業務に求められる責任はより重くなっている。品確法は紛争を防止する一定の役割をもっているが、紛争は今後増えていくだろう。情報量の多さに惑わされることなく、確実な判断や対応を心掛けていきたい。

三四五建築研究所 北岡 正弘

「ユニバーサルデザイン」による
都市デザインワークショップ

～快適・やさしい・安心の
福井駅周辺まちづくりを考えよう～

先日2月15日に福井駅前で「ユニバーサルデザイン」をテーマとしたワークショップを開催しました。

企画・運営は私たち公務員や都市計画コンサルタント、福井大学の学生らで組織するまちづくりNPO「福井アーバンデザイン研究会」です。

現在、JR福井駅を中心とする中心市街地では、連続立体交差事業、再開発、地下駐車場整備事業などが同時進行し、市街地が大きく変貌を遂げようとしています。そんな中、市民にとって安心で快適な駅前まちづくりとは何かを考えてもらうのが目的です。

当日は、アルパック榎地域計画建築研究所で福祉のまちづくりを専門とする大河内さんの講演会の後、インスタントシニアセット、車イス、アイマスク、ベビーカーを体験しながら中心市街地をタウンウォッチしました。その後会場に戻り、グループごとに感想を話し合い地図にまとめました。

参加者は30名程度でしたが、シニアセットやアイマスクは初めての人ばかりですごく有意義な体験だったと好評でした。また、普段も車イスで生活する養護学校の生徒さんや、子供連れのお母さんの参加もあり、一緒にタウンウォッチすることで、普段見落としがちで、舗装の凸凹でベビーカーが振動してしまうことや、車イスは視線が低い位置にあるため信号などすべてのサインが見にくくなっていることなど貴重な意見を数多く聞く事ができました。

すべての人に使いやすい「ユニバーサルデザイン」は、ユーザーの声を反映するプロセスを重視する「参加のデザイン」といわれています。福井のまちづくりがこの理念に沿って市民参加が進められることを願って私たちのまちづくりNPOも益々がんばっていこうと思います。



福井アーバンデザイン研究会&福井市役所
福岡 敏成
(研究会のHP : <http://fukui.cool.ne.jp/fud1992>)

CAD/CG を利用したデザイン教育についての雑感

私をはじめてCGを習い始めたのが大学院に在籍していた頃で、今からおおよそ15年ほど前になります。そのころは当時の煩雑なコンピュータ操作をようやく使いこなして、建築や都市空間のプレゼンテーションをつくるといったものでした。

周知の通り、最近ではパソコンの飛躍的な普及によりCAD/CGはだれにでも簡易に利用できるようになりました。例えば昨年8月に本校で開催された建築学会全国大会の卒業設計展でも、9割以上がCAD/CG図面になっていたと思います。そこでは面白いことに、手描き図面の方がめずらしくて目についてしまい、新鮮な印象さえも覚えてしまいます。また実際に手描き図面を描く学生は自分の画力に相当な自信がありますから、必然的に作品自体も美しい仕上がりとなっているわけです。

さて、本原稿の結論から先に言いますと、私は現在のCAD/CG教育や学生のCAD/CG利用にいくつかの大きな不満があります。それは例えば以下のようなものです。

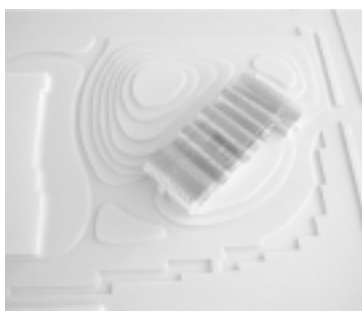
- 1) イマジネーションが圧倒的に欠如している
- 2) デザインに対する感受性を高めようとしていない
- 3) 自分の画力(腕)を上達させようとしていない、描く楽しみを望まない
- 4) CAD/CGを見る目が全くない

- 5) CADデータのアウトプットと図面のプレゼンテーションを誤解している
- 6) デザインに対するネガティブな理由でCAD/CGに淡い期待を寄せている
- 7) 単なる理系離れをデザイン志望でごまかしている

つまり自己のデザイン・マインドや表現力の低さをごまかすために安易にCAD/CG利用に流れる学生が多いこと、そのため自らが描いた表現の醜・美について全く自覚していない、コンピュータ操作に興味がつり複雑な描画機能を使うことが高度な表現をつくりだすと勘違いしている、などが痛切に感じられるのです。

私個人としては、建築のデザイン思考については個人の感受性や資質に大きく依存しており、CAD/CGなどのツールによるデザイン支援の可能性はもはや論じる意味を感じておりません。しかし、デザイン表現やプレゼンテーションが持つインパクトや訴求力は疑っておらず、せめても効果的にCAD/CG、画像操作などを含めた新しい表現手法を積極的に自己開発し使いこなしてほしいと願っております。かくいう私自身も雑務にかまけてデザイン・マインドを失わぬよう、日々精進を重ねる必要を切に感じている次第です。

金沢工業大学 川崎 寧史



いこい館 PROJECT



TAKAOKA NATIONAL COLLEGE

「いこい館 PROJECT」 加藤芽ぐみ (高岡短期大学専攻科 産業デザイン専攻)



「包 pao」 松本 知文 (金沢工業大学 建築学科4年)



月輪山願念寺納骨堂

月輪山願念寺は寛元元(1243)年、月輪経家卿の創立と伝えられ、創立当初は天台宗の寺院であったが、その後浄土真宗となり、建長3(1251)年に現在地に移り、文化3(1806)年落成の大規模な

本堂を構える。

この本堂左手に笏谷石((福井市の足羽山近辺で産出する凝灰岩の一種)で造られた納骨堂が建っている。背面の銘文や記録によると、鶉小学校の奉安庫を昭和22(1947)年10月に購入し、翌23年6月に移築完成したものである。竣工当時の奉安庫の写真をみると、基壇の自然石から全てがそのまま移築されたことが知られる。

この鶉小学校奉安庫は、同校の記録によると昭和2年12月に焼失した校舎を同4年8月に新築した時に、奉安庫および奉安殿も造られている。この時、同窓会が奉安庫および講堂正面の奉安殿の寄付を同窓生に呼び掛け、奉安庫は隣集落の浜四郷の出身で北海道札幌市の藪惣七氏の寄付によって同年8月25日に竣工し、奉安殿は同窓会員等の寄付によって11月に竣工している。

筆者の知る限りでは、戦前の教育施設建設では地元への寄付が大きな財源であった。そして、天皇陛下や皇后陛下の御真影を安置する奉安庫や奉安殿の建設は、明治憲法下での臣民としての意志表現の手段であったようにも思う。朝夕必ず職員や生徒が一礼するため、鶉尋常高等小学校では学校の玄関脇、職員室の前に奉安庫が建てられていた。

方形棧瓦葺の屋根頂部に石造の宝珠を置き、外形で約2.3mの正方形平面のがっしりとした造りである。外部は洋風の意匠で構成され、4隅には溝を掘った角柱を建てる。入口底には手の混んだ装飾が柱から屋根を飾る。1本の石材を掘り出した円柱は、柱身上部を少し細くし、柱頭には写実的なアーカンサスの葉を飾る。屋根の半円形内部には透かし彫りの半円形の菊紋を大きく設けている。また、軒天井も石となっている。内部は全て桐の造作で、前面は折り上げ格天井となっている。後述の山口伊三郎氏の作と推測される。

奉安殿の一部は現在の小学校玄関に飾り棚として残され、柱頭は奉安庫と類似のデザインである。福井の家具職山口伊三郎氏が請け負い、遠く京都や名古屋に視察に出かけ、同窓会役員も県内を視察するなど、人々の思い入れも強かったことが推測される。

現在、奉安庫や奉安殿の遺構は少なく、歴史的には貴重な建物である。それ以上に、当時の人々の力を注ぎ方が意匠や材料、建設の経緯や建設費などからも伺える。その建設に対する姿勢は明治初期の擬洋風建築と相通じるものがあり、昭和初期を象徴する石造の擬洋風建築とも言える。なお、近年、若越建築文化研究所(代表:国京克己氏)によって実施された石造建造物の調査で、新たに遺構が発見されている。

福井大学 高嶋 猛

近年、地方都市では生活の郊外化による中心部の衰退・空洞化が問題になっています。金沢市でも金沢大学の郊外移転に伴い、街から学生の姿が減るなど、活気がなくなりつつあります。かつてあった学生街の雰囲気は、現在の香林坊をはじめとする市中心部にはありません。

そんな中で生まれた「香林坊ハーバー」とは、かつて中心街を賑わせ、今まさに消えようとしている映画街で廃業していた映画館を使って、学生たちの手で街の賑わいを取り戻そうとするものです。映画館を改修し、その企画・運営までもを学生たちに託し、2年という期間限定ながらも、若者のパワーとアイデアで街の活性化を図ろうとする、街づくりの新しいモデルケースだといえます。

ここでわたしたちはデザインチームとして、建物の内外装はもちろん、ロゴ、web、フライヤーなどハーバーのトータルイメージのプロデュースに関わって来ました。極めて少ない予算と数々の制約の中で、それでもここでしかできない多目的なイベントスペースとすべく生まれたたまご型のステージには、既成概念にとらわれず、新たな発想でいっしょにこのステージを使いこなしていこうというわたしたちの思いがこめられています。

また、新しく再生する建物を単なるハコモノにしないように、他のチームや行政と連携し、何度もワークショップや議論を重ね、ハードとソフトの融合した建築にしようとする取り組みのプロセスは、建築を学ぶわたしたちにとって非常に貴重な経験となりました。

香林坊ハーバーは昨年10月にオープンして以来、わたしたちの予想を超える反響を呼び、様々なイベントが催されてきました。わたしたちの設計したステージもこちらの思いもよらない使い方をしてもらえるなど、大変嬉しく思っています。

これからもわたしたちは楽しみながら街に新たな活力と文化を生みだせる時代の港

「香林坊ハーバー」を目指して取り組んでいきたいと思ひます。



香林坊ハーバーURL <http://www.k-harbor.com>
金沢工業大学大学院 半本 隼也

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第24号

発行日 2003年5月21日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

清水 恵一(新潟) 玉井 泰子(富山)

西山マルセロ(長野) 宮下 智裕(石川)

野嶋 慎二(福井) 菊地 吉信(福井)

事務局 白土 孝・瀬口さゆり

〒920-0863 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F

TEL&FAX 076-220-5566